

目次



1 本企画について

1ページ



5 資材完成報告・対話会

10～11ページ



2 体験プログラム

2～5ページ



6 情報発信活動

12～17ページ



3 資材制作過程

6～7ページ



7 学生振り返り

18ページ



4 解決策を考える

8～9ページ



8 おわりに

19ページ

About Innovation for NEW HOPE



Innovation for NEW HOPEは、「日本で最先端の治療法が1日でも早く、継続して届く社会の実現」を目指し、同じ志を持つメンバーによって2023年に発足しました。最先端の治療法について、患者さんや市民とともに、「あるべき未来」や「課題」を議論し、その時点で確かな情報を基に、患者さんや市民の疑問に答える資料を患者さんや市民とともに制作して広く提供しています。また、最先端の治療法の多様な価値について専門家、患者さん、市民の意見も取り入れながら議論し、わかりやすく情報発信しています。（運営企業：アステラス製薬株式会社）

Innovation for NEW HOPE 委員 (2026年3月現在)



小坂 仁
自治医科大学
小児科学教授
自治医大とちぎ子どもセンター
センター長



桜井 なおみ
一般社団法人
CSRプロジェクト
代表理事



大黒 宏司
日本難病・疾病団体
協議会(JPA)
代表理事



武藤 香織
東京大学
医科学研究所
公共政策研究分野 教授



森尾 友宏
東京科学大学
理事/副学長 特別教授



八代 嘉美
藤田医科大学
東京橋渡し
支援人材統合センター教授

本企画について

学生が挑む！ 市民の疑問解決プロジェクト ～最先端の治療法を届けるために～



参加学生集合写真（初対面時）

<目的>

学生と共に社会課題解決に取り組み、これからの社会を変えることに挑戦する

<資材制作のテーマ>

日本で最先端の治療法が届かないのはなぜ？日本で最先端の治療法が1日でも早く、継続して届く社会の実現を目指して

より良い社会の実現

学生が挑む！市民の疑問解決プロジェクト



社会課題の議論



日本で最先端の治療法が1日でも早く、
継続して届く社会の実現

- 新しい治療を選択することができる
- 一人ひとりが自分らしく人生を全うする
- 暮らしをより豊かに、すべての人生の可能性をひろげる

「学生が挑む！市民の疑問解決プロジェクト」は、学生と共に社会課題解決に取り組み、これからの社会を変えることに挑戦することを目的としました。具体的には、「日本で最先端の治療法が届かないのはなぜ？」をテーマに据え、この課題を解決するための資材制作・情報発信を進めたほか、最先端の治療法が届く社会に向けた解決策も考えました。

まず、学生は3月の体験プログラムを通じて、日本の医療の現状や課題について深い理解を得ました。2025年3月13日には、アステラス製薬本社にてドラッグ・ラグ等の医療課題を学び、3月14日には、アステラス製薬つくば研究センターにて最先端の創薬と研究環境を見学しました。さらに3月28日には、最先端治療法の価値や患者さん・家族の想いを知る時間を持ち、3月31日には、薬価制度や国民皆保険制度について学ぶ機会を得るなど、多面的な視点から医療に関する知識を深めました。

体験で得た知識を基に、4月からは6つのチームに分かれ、資材制作に取り組みました。最先端の治療法に関する課題を市民に分かりやすく伝えるため、話し合いを重ねながらコンテンツを作成しました。5月の学生同士のブラッシュアップ会、6月のInnovation for NEW HOPE委員からのフィードバックなどを通じ、資材をより良いものにするために奮闘しました。

また、資材制作にとどまらず、最先端の治療法が届く社会を目指して、学生自らが解決策を考えてきました。

完成した資材は、2025年9月3日に開催した資材完成報告・対話会にて、124名の方の前で発表しました。さらに、ショッピングモールや学園祭での出展、学校での授業などの市民向け情報発信の機会で資材を活用し、多くの方々にプロジェクトの成果や提案を届けることができました。

このプロジェクトを通じて、学生は得た知識を社会へ伝える力を養いつつ、「最先端の治療法が1日でも早く継続して届く社会」を実現するための一歩を踏み出しました。学生の取り組みが、より多くの市民に医療への興味を広げてもらうきっかけとなり、未来の医療を共に考える機会を創出しています。

→ 体験プログラム①

日本の医療の現状を知る



自己紹介の様子



森尾友宏さん講演



岸部知佐子さん講演

体験プログラム①は、オリエンテーションの実施と、医療課題の現状を知ることが目的として開催されました。

まずはお互いを知るために、自己紹介から始めました。

参加学生の大学・学部やバックグラウンドも多様で、自己紹介を通じてそれぞれのパーソナリティを垣間見ることができ、これからの協働を期待する雰囲気が高まりました。

岸部知佐子さんの講演では、ご子息の治療の道のりで直面したさまざまな課題や、その時々親子での会話、正直なお気持ちをお話いただきました。学生は医療課題に直面された当事者の方から直接お話を伺い、医療課題は解決すべき重要な問題であると改めて感じたようです。また学生は時おり涙ぐみながら真剣に聴いており、この現状を変えることへの挑戦意欲を一層強くした様子でした。

Innovation for NEW HOPE委員 森尾友宏さんの講演では、臨床医の立場から、ドラッグ・ラグ/ドラッグ・ロスの現状や最先端の治療法への期待についてお話いただきました。

講演中には質疑応答の時間が設けられ、森尾さんと学生が双方向にコミュニケーションを取りながら講演が進行しました。学生からはドラッグ・ラグ/ドラッグ・ロスの要因について鋭い質問がいくつか寄せられ、森尾さん自身の視点から丁寧に回答してくださいました。これにより、医療課題について臨床医の立場からの視点も知ることができました。

その後、ドラッグ・ラグ/ドラッグ・ロスの要因についてグループディスカッションを行い、事務局から補足のレクチャーを行いました。

1日を通じて、参加メンバー同士の相互理解が深まるとともに、医療課題の現状とその要因についての多面的な理解が進展しました。



体験プログラム①概要

日時：2025年3月13日（木）

場所：日本橋ライフサイエンスビル（AM）、
アステラス製薬本社（PM）

主な内容：

- 自己紹介/オリエンテーション
- 岸部知佐子さん講演
- Innovation for NEW HOPE委員 森尾友宏さん講演

講演をしていると、息子がまだ生きてくれているような気持ちになりました。

あの学生さん達のこれからのスキルアップのプロセスに、息子の存在や、私の言葉等が何か少しでも影響するのでしたら、こんなに嬉しいことはありません。



体験イベント① 演者
岸部知佐子さんコメント

→ 体験プログラム②

知ろう！創薬研究の最前線



体験プログラム②の概要
日時：2025年3月14日（金）
場所：アステラス製薬つくば研究センター
主な内容：
• 目標設定
• 研究施設の見学
• 最先端の治療法の創薬を専門とする研究員との対話
• オープンイノベーションに関するレクチャー

体験プログラム②は、アステラス製薬つくば研究センターを訪問し、創薬研究の最前線を学ぶことを目的として開催されました。

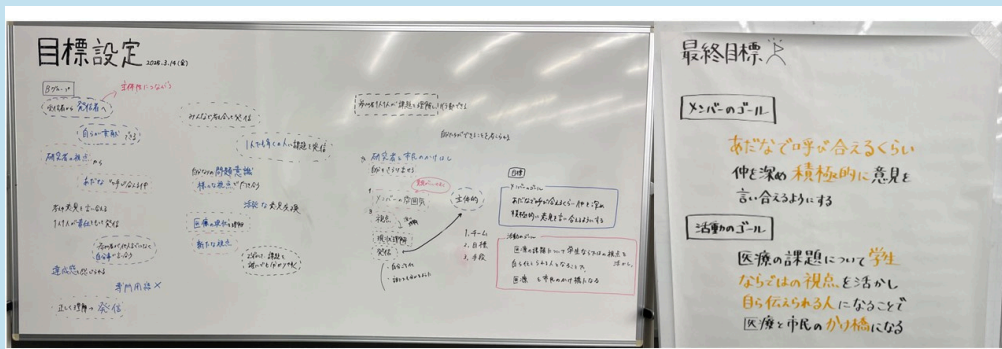
最初にプロジェクト全体の目標設定を行いました。ホワイトボードのまわりに集まり、メンバー全員で意見を出し合いました。その結果、メンバーのゴールは「あだなで呼び合えるぐらい仲を深め積極的に意見を言い合えるようにする」、活動のゴールは「医療の課題について学生ならではの視点を活かし、自ら伝えられる人になることで、医療と市民のかけ橋になる」に決まりました。

つくば研究センターでは、よりよくすりの候補を効率よく見つけるために、「人xAIxロボット」が相互に補完しあい、協働しています。今回の体験では、実際にロボットが作業している現場を見学しました。研究員との対話では、最先端の治療法への期待だけでなく、研究における難しさや、それらの課題をどう乗り越えていくかについて知る機会になりました。

最後のレクチャーでは、オープンイノベーションやエコシステム推進の背景や現状に加え、SakuLab^(注)のような実例や今後の展望についてお話いただきました。学生からは、素朴なものから専門的な内容まで幅広い質問が寄せられ、研究員の方々が一つひとつ丁寧に回答してくださいました。

参加した学生からは、「ロボットができるところはロボットに任せて、研究員は他の研究や仕事にその時間を当てられるので、人間とロボットの住み分けの重要性を学んだ」、「創薬に対する強い想いや、患者さんのために新たな治療法を生み出そうとする熱意を直接感じる事ができた」、「みんなで知恵を出し合っ、『患者さんを救いたい』という目的に向かって協力し合う利他的な精神がこれからの時代により一層求められていると感じた」などの感想が寄せられ、それぞれが学びや気づきを得る貴重な機会となりました。

(注) アステラスつくば研究センターの敷地内に設立されたオープンイノベーション拠点



参加学生の意見（左）と設定した目標（右）



集合写真

きらきらと目を輝かせながら鋭い質問をしてくれる学生の皆さんに、私自身も元気と勇気もらいました。意思のあるところに道はできる。いつか学生の皆さんが、オープンイノベーションを共に進める仲間になってくれる日を心待ちにしています。

体験イベント② 演者
齊田 恭子さん コメント



→ 体験プログラム③

最先端の治療法がもたらす価値と、
患者さんにご家族の物語にふれてみよう

体験プログラム③は、最先端の治療法がもたらす価値を学び、患者さんと対話する中で気づきを得ることを目的に開催されました。

薬剤経済学専門家である五十嵐中さんの講演では、日本の保険制度の課題や治療がもたらす多様な価値について問いかけを交えながらお話いただきました。治療がもたらす価値は人によって異なること、そして数値では測れないけれども大切な価値もあることなど、学生は先生からの問いかけに悩みながらも真剣に考えている様子でした。

映画「奇跡の子供たち」は、希少難病の患者さんとその家族を10年にわたって追いつけたドキュメンタリーです。遺伝子治療を受ける機会を得たことで、この患者さんのケースでは、首が座るようになり、自分の意志でものを掴んだり、まさに奇跡のような変化が起きたことを知りました。学生からは「治療によって患者さん、ご家族、そして主治医の先生が笑顔になったのが印象的だった」等のコメントがありました。

Innovation for NEW HOPE委員である小坂仁さんは、映画で描かれた希少難病の治療にも携わっている小児科医です。遺伝子治療について、その発展の歴史や実際の治療例、そして医療者としての想いなどをお話いただきました。

その後、病気や健康上の理由などで外出が困難な方々が分身ロボット『OriHime』＆『OriHime-D』を遠隔操作し、サービスを提供している、分身ロボットカフェDAWN ver.βを訪問しました。ご自身の病気と向き合いながらも前向きに行動し続けているパイロットの方々とは直接対話をするなかで、学生の最先端の治療法が届く社会を実現するために挑戦したいという想いが、より一層強くなりました。



分身ロボットを介した
病気や健康上の理由などで外出が困難な方々との対話



五十嵐中さん講演



小坂仁さん講演

価値の多様性や数字で表現できない価値について、学生が気づき、自分事として議論すべき課題と感じてくれたことは非常に嬉しいです。様々な視点で学び、発信へつなげるこの活動にぜひ今後も多くの学生に参加してほしいと思います。



体験イベント③演者
五十嵐中さんコメント

株式会社オリィ研究所
伊東美和さんコメント

パイロットから「将来ある若者のみなさんへ当事者の思いをお伝えするという、滅多にない経験ができ、本当に楽しかった」とコメントがありました。パイロットとのコミュニケーションが学生の心に残り、発信活動に組み込んで頂いていることを嬉しく思います。

体験プログラム③概要

日時：2025年3月28日（金）

場所：アスTRAS製薬本社、
分身ロボットカフェDAWN ver.β

主な内容：

- 薬剤経済学専門家 五十嵐中さん講演
- 映画「奇跡の子供たち」鑑賞
- Innovation for NEW HOPE委員 小坂仁さん講演
- 分身ロボットカフェDAWN ver.βでの病気や健康上の理由などで外出が困難な方々との対話

→ 体験プログラム④

日本の薬価制度・医療制度を見てみよう！

体験プログラム④概要

日時：2025年3月31日（月）

場所：アステラス製薬本社

主な内容：

- 薬価制度に関するレクチャー
- 明治安田生命保険相互会社 小池祥悟さん講演
- 現状の薬価制度・医療制度の良いところ・課題に感じたところのディスカッション
- 体験プログラム①～④の学びの共有と今後の資料制作に向けたディスカッション



薬価制度に関するレクチャー

体験プログラム④は、薬価制度や国民皆保険制度などの日本の医療制度をテーマとして開催されました。

はじめにアステラス製薬渉外部から、日本の薬価制度を中心にレクチャーがありました。日本の国民皆保険制度の特徴や、国民医療費の内訳といった、医療保険制度の基本的な仕組みについて紹介がありました。その後、薬価の算定方法について、他国の事例も交えながら学びました。また、日本の薬価は定期的な改定されていること、その仕組みや背景を学ぶことで、日本の薬価制度の全体像を把握しました。

続いて、明治安田生命保険相互会社の小池祥悟さんから講演いただきました。日本の国民皆保険制度の歴史や他国との違いを学ぶことから始まり、少子高齢化が進む日本の現状や、医療技術の進展が、国民皆保険制度にどのような影響を及ぼすのかについて学びました。小池さんの立場から、民間保険が果たすべき役割等についてもお話があり、多くの示唆を得る機会となりました。

講義後、参加者同士で感想を共有する時間を設けました。薬価制度・医療制度について「良いと感じた点」や「課題に感じた点」を率直に話し合うことで、制度に対する理解が一層深まりました。

その後のディスカッションでは、これまでの体験プログラムから得た学びを一人ひとりが言語化したポストイットをホワイトボードに貼り出す形で共有しました。さらに、資料制作テーマである「日本で最先端の治療法が届かないのはなぜ？」を誰に伝えたいか？についても話し合いました。

1日を通じて、日本の医療制度を学ぶことに加え、これまでの体験を通じて得た学びを整理することができました。



小池祥悟さん講演



体験プログラムの学びをグルーピングする様子

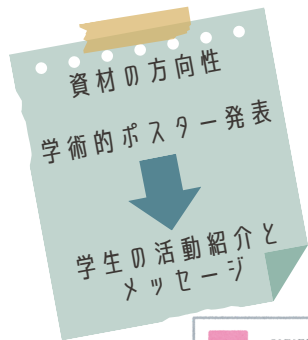


体験イベント④演者
小池祥悟さんコメント

学生の皆さんが制度や保険の本質を捉え、真剣にこれからの医療を考える姿に深く感銘を受けました。今後の活動の更なる広がりを心から期待しています。私自身も新たな視点と刺激をいただき、大変有意義な時間となりました。

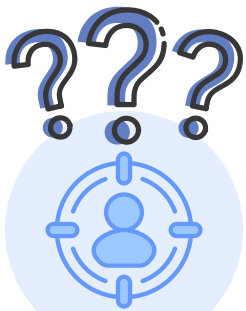
→ 資材制作

～壁に直面しながらも



研究者向けチーム（『三位一体』）

当初の予定では学会でのポスター発表を目指し、学術的な研究発表として骨子案を作成していましたが、そんな中、6月のInnovation for NEW HOPE会議にて委員より、学術的発表として資材を纏めることについて多数のご指摘を受けました。事務局と学生で話し合い、方向性を大幅に変更することとなりました。学術的な内容から、Innovation for NEW HOPE学生アンバサダーの活動紹介をメインとする内容に軌道修正しました。



5つのターゲットと
6つのチームを決定（4月頭）

- ・ 親子向け
- ・ 高校生向け
- ・ 大学生向け①
- ・ 大学生向け②
- ・ 研究者向け
- ・ シニア世代向け



企画書で資材の方向性を検討（4月後半）

- ・ ターゲットのペルソナ
- ・ 理想状態
- ・ 資材概要

など



資材を制作・ブラッシュアップ（5-6月）

- ・ 学生同士のフィードバック（ブラッシュアップ会）
- ・ 委員からのフィードバック（Innovation for NEW HOPE会議）

大学生向け①チーム （『まもりソ私立アステラス大学』）

はじめは、動画からクイズとまとめ、その後の目指したいアクションへとつながるストーリー作りに苦労しましたが、学生同士のフィードバックや委員のアドバイスをうけて、動画の内容を大胆に変更。また、クイズの解説では身近に感じられる話を紹介したり、まとめもアクションにつながるロジックをよく考え、健康習慣チェックは大学生ならではの生活習慣を事例に取り入れるなど工夫を重ねました。その過程で、動画・クイズ・まとめ・アクションまでのつながりも分りやすくなり、大学生にも興味をもってもらえる資材になっていきました。



オリジナルキャラクター
『まもりそ博士』

シニア世代向けチーム （『あいしずだもんで』）

対象者に「何をどのように伝えるか」という方向性の設定に時間を要しましたが、メンバーそれぞれが自身の専門性を活かし、互いの意見を尊重しながら議論を重ねました。ポケットティッシュで興味を引きつけ、ポスターでメッセージを伝え、来場者に川柳でアウトプットしていただくという一連の流れの中で、市民の方々にどのように伝わるかを具体的にイメージしながら、資材全体の構成を形づくっていきました。



の過程

資材を完成させるまで～

高校生向けチーム（『東西』）



高校生向けの授業資材を作成した東西は、一方通行の授業ではなく、高校生自身が考え行動変容することを目指しました。インプット内容やディスカッションテーマが高校生に魅力的に伝わるかどうか、実際の高校生向けにデモを実施して内容のブラッシュアップを行いました。高校生から率直なフィードバックをもらい、よりよい授業内容に改善していきました。

6月 学生同士のデモンストレーション
（親子向け・大学生向け①②チーム）



9月 専修学校クラーワ高等学院
札幌大通校
（高校生向けチーム）



6月 横浜市立大学
（大学生向けチーム②）



各地でデモンストレーションを実施（6-9月）

親子向けチーム （『おくすりレンジャー』）

薬が患者さんのもとに届くまでの道のりを親子で楽しく学べるよう、体験型のすごろくを作成しました。薬が出来るまでの道のりや、その過程で生じる課題をすごろくのマス目で表現する際には、専門用語を使わず、対象である子どもにもわかりやすく伝わるよう工夫しました。完成に至るまで何度もデモンストレーションを行い、他のメンバーからのフィードバックを受けて改良を重ねながら、より楽しく理解しやすい内容へとブラッシュアップしていきました。



大学生向け②チーム （『優しみレボリューション☆』）

未知の疾患にかかるという想定で様々な意思決定を「すごろく」で体験するという資材の制作は簡単ではありませんでした。Innovation for NEW HOPE委員の桜井なおみさんからの患者さん視点でのアドバイスを反映させることと、大学生にとって学びやすくすることを両立するのがとても難しく、一時はすごろくではない形での制作を考えました。しかし、最後まで諦めずにマス目の内容やゴールの検討に向き合い、奮闘しました。



最先端の治療法が届く社会を目指して

→ 解決策を考える

本プロジェクトは「学生と共に社会課題解決に取り組みこれからの社会を変えることに挑戦する」ことを目的としていました。そのため、資材制作にとどまらず、最先端の治療法が届く社会を目指して、学生自らが解決策を考えてきました。

解決策（案）の一部

各々が感じた課題・解決策を言語化

体験プログラムで感じた課題とそれを踏まえて考えた解決策（案）を一人一人が言葉にしました。

これから取り組む情報発信に関わるもの、社会環境の在り方、新たなアイデアなど、様々な解決策（案）が挙がりました。



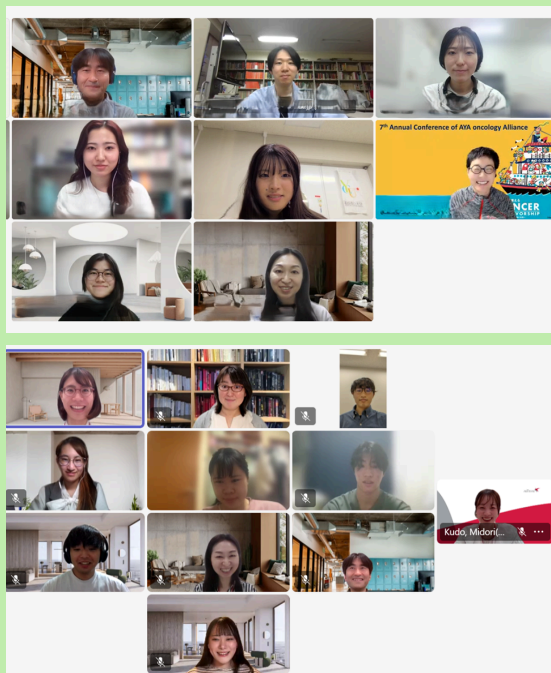
患者さんと触れ合う機会の中で、治療法についての情報を医師からだけでなくインターネットや知り合いから得ているケースの多さに気づかされました。必要な患者さんに最先端の治療法が届くためには、まずその治療法があるということを治療に関わるステークホルダーに知ってもらう必要があると思います。その病気に対してのコミュニティを築き、コミュニティ同士のコネクションを簡単に得られるようなシステムがあれば、素早く知ることができるのではないかと考えました。

現状について知る→関心を持ち、自分なりの考えや思いを持つ→その人の周りに伝わる→関心を持ち・・・（以下略）といったように、このサイクルを利用して、どんどん輪を広げていくことが重要であると考えます。

医薬品版ふるさと納税したいです。特定の治療薬の研究や製造を支援するために、市民が寄付できる制度を創設します。寄付者には税控除や医療費割引などのインセンティブを付与します。

具体的な解決策として提示することはまだ難しいが、「自分事としてとらえてもらう」「自分が病気や治療、医療に関わるかどうか否かに関わらず考えてもらうことができるきっかけを目指す」「もし、自分の子供がこのような状況だったら/父親母親がこのような状況だったら」などのシチュエーションを用意するなどして積極的に参画してもらうことを目指す。

Innovation for NEW HOPE委員との対話会の様子



5月：Innovation for NEW HOPE 委員との対話会

Innovation for NEW HOPEの委員である武藤香織さん、八代嘉美さん、桜井なおみさんと4グループに分かれて、対話を行いました。

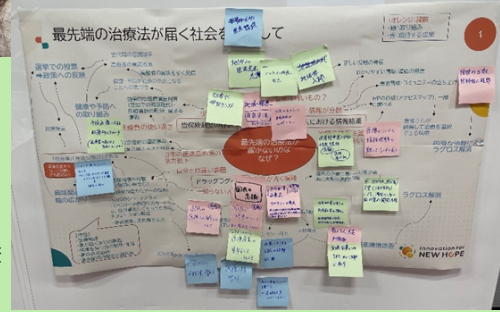
各自が感じた課題と解決策を伝え、委員からは「情報発信においては違うグループへの働きかけを一緒に考えることが重要」「関心がない人に知ってもらうモチベーションを持ってもらうには、どうしたらよい?」「リテラシーを上げることも大事だが、社会の“寛容さ”を忘れてはいけない」など様々な質問や助言がありました。学生からも「日米の医療制度の違いによる、国民のヘルスケアの状態の違いは?」「多くは消費者と生産者のバランスによって価格が決まるが、薬の場合はどうなのか?どこか一部に損が偏るのは良くない」など、活発に意見交換が行われ、学生の視野が広まりました。

6月：Wrap-up会

学生から挙げた課題・取り組み・期待する成果をマッピングし、全体像を見ながら、学生同士で追加のアイデアを付箋に張り、議論しました。体験プログラムからの約3か月間で、資材制作や日々の生活の中で新たな気づきや考えがたくさん芽生え、多くの観点が挙がりました。友人と話して気づいたこと、大学の授業で考えたことなど、このプロジェクトでの活動以外でも学生たちの学びが広がっていることを共有してくれました。



追加のアイデアを付箋で共有



谷本龍哉さんとの対話会の様子



9月：谷本龍哉さんとの対話会

政治・行政専門家である谷本龍哉さんに解決策マップを紹介しながら、意見交換を行いました。政治家の経験もある谷本さんに対し、「市民の声を政治に届けるには?」「国民皆保険の持続可能性は?」など、日々活動を取り組む中で感じる疑問を率直にぶつけました。学生からは「医療課題に対する理解が深まり、私たちが果たすべき役割の重要性を再認識した」「『対話が人の心を動かす』という言葉は、今後の活動を考える上で大きなヒントになった」などのコメントがあり、政策立案者の想いや政策立案過程の理解が深まるとともに、市民の声の重要性を感じる機会になりました。

谷本龍哉さんコメント



学生の皆さんが課題意識を持ち、真剣に未来の医療や社会の在り方を考える姿に頼もしさを感じました。今回得た視点を活動に活かし、社会を動かしていくことを期待しています。

10月：本田あきこさんとの対話会

現役の参議院議員である本田あきこさんからの講演、意見交換を行い、本田先生からはご自身の政治を志した想い、政治の現状などをわかりやすくお話しいただきました。意見交換では、政策を実現する難しさ、医療政策の取り組みなど、学生の質問や意見に対して、本田先生から丁寧にご回答いただきました。「現役の政治家の先生と直接対話できる機会はとても貴重であった」「活動を続けることで、社会に伝わっていくという希望が感じられた」「本田先生の志や困っている人の声を変えたいという思いに共感し、若者の意見を社会に届ける重要性を感じた」など、学生にとっても政治への関心、このプロジェクトへの熱意が高まる貴重な機会になりました。

本田あきこさんとの対話会の様子



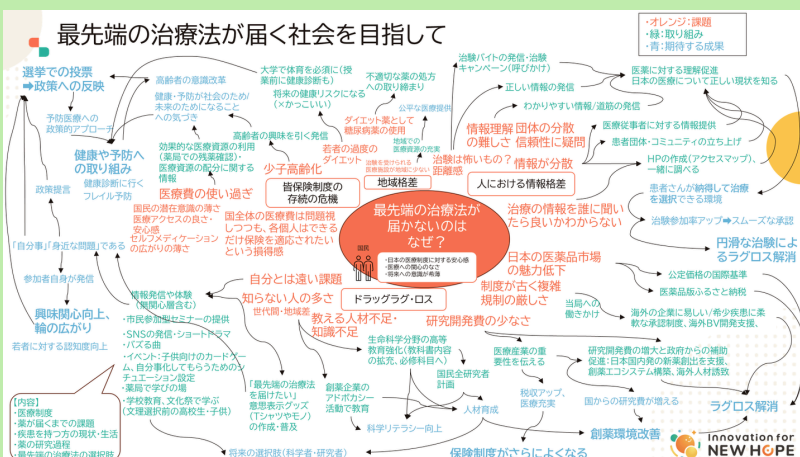
本田あきこさんコメント

未来を担う学生の皆さんが生き生きと語り合う姿がとても輝いていて、とても刺激的な対話の時間を過ごすことができました。自分たちの活動が社会・国へ届いていると実感できるよう、これからも応援していきます。

学生が考えた解決策

体験プログラム、Innovation for NEW HOPE委員との対話、Wrap-up会の中で、学生から挙げた考えをマップにしました。

「最先端の治療法が届かないのはなぜ?」という問いに対する課題(オレンジ)、解決するための取り組み(緑)、その取り組みから期待する成果(青)をまとめています。粗削りな表現もありますが、学生の考え・言葉を可能な限りそのまま示しています。



→ 資材完成報告・対話会



ステージトークの様子

学生は「医療の課題について学生ならではの視点を活かし、自ら伝えられる人になることで、医療と市民のかけ橋になる」という想いを込めて、情報を伝える対象を決め、資材制作に取り組みました。そして9月上旬、資材完成報告・対話会を開催し、会場・オンライン合わせて124名もの方にご参加いただきました。

学生の発表では、資材の内容紹介だけでなく、体験プログラムを通じて感じたことから始まり、資材の対象を選んだ理由や、資材の制作を終えた今の想い、そして今後の情報発信活動への意気込みまで語られました。参加者からも学生にたくさんのコメントやフィードバックが寄せられました。

発表後の対話会では、参加者の皆さんから、自身の活動に「参考になった」と思う点や「自分の取り組みに取り入れてみたい」と感じた点などをお話いただきました。また、その後の交流会では、学生が制作した資材を間近で見ながら、参加者の皆さんと学生の間で活発に会話する様子が見られました。

イベント終了後、多くの参加者から感想をいただきました。特に、「学生が医療課題に真摯に向き合う姿に感銘を受けた」という声が多くありました。さらには、「自分の言葉で課題解決の方法を伝えていたことが印象的だった」との感想も寄せられ、学生たちの熱意や真剣さがしっかりと伝わっていたようです。

開催概要

【日時】 2025年9月3日（水）
15:00-18:00
【会場】 日本橋ライフサイエンス Hub
/ オンライン
【参加者】 合計124名
(現地67名・オンライン57名)

プログラム

1. ステージトーク

15:00 Opening remarks
15:15 学生による資材発表
17:05 Closing remarks

2. 対話セッション (会場参加者のみ)

17:10 グループ対話
17:40 交流



グループ対話の様子（左）、交流の様子（右）

参加者（アステラス製薬株式会社
代表取締役社長CEO）
岡村直樹さんコメント



発表の仕方、質疑応答の対応、説明のテンポなど、あらゆる点においてよく考えられた素晴らしいプレゼンテーションでした。運営事務局（アステラス製薬）の言葉を鵜呑みにするのではなく、自分の耳で聴き、目を見たことをもとに自分の頭で考える習慣を身につけ、今後も引き続き努力を続けてほしいと思います。

発表学生コメント（アンケートより）

- このような場で発表する機会は初めてでとても緊張しましたが、良い経験になりました。
- 多くの人に自分達が制作した資材を知ってもらうことができとても良かったです。
- 対話会では、企業の皆さんがどんなことをしているのか等教えてくださり、本当にすごい方ばかりでお話を聞くのが楽しかったです。
- 資材は他の機会でも利用可能だと思うなどのご意見をいただき、今後の活動に向けての励みになりました。

会場来場者からの反応

- 資材は大学講義でも使ったら良いと思えるほどのクオリティだった（明治薬科大学教授 前田英紀さん）
- 学生の声を反映させることの重要性を改めて認識し、自団体のセミナーに学生を呼びたくなった（HGPI 乗竹亮治さん）
- 学会で学生とコラボレーションしたセッションが増えたら良いなと思った（日本再生医療学会 清水もも子さん）



発表学生集合写真

→ 市民イベント出展

秋からは、いよいよ情報発信の段階へ入っていきま
した。

2025年11月1日（土）および2日（日）の2日間、イ
オンモールKYOTOで開催された「超ECO祭2025」で
は、親子をターゲットとして資材を制作してきた
『おくすりレンジャー』チームが出展を行いました。

超ECO祭は健康・医療と環境のエコ活動を“共に創り
上げる”ことをテーマにしたイベントです。

Innovation for NEW HOPEの超ECO祭出展は今回で2
年連続となり、いずれの回も学生が運営に関わって
います。

創薬プロセスをたどる大きなマス目のすごろくを、
『すごろくdeおくすりが届くまでを体験しよう！』
と題して、『おくすりレンジャー』チームの学生4
名が中心となり、協力学生7名と共に出展しまし
た。

ショッピングモールという場所柄、親子連れの来場
が多いと予想していましたが、来場者のうち半分以上
が大人の方でした。床に置いたすごろくの大きな
マス目の上にしゃがみこんで、学生の説明を聞いた
り、クイズやゲームに一喜一憂する小さな子供たち
の姿は微笑ましく、一方で大人の方も真剣に学生の
説明に耳を傾けながら、わからないことがあったら
質問をする姿が見られました。

来場者からは、「創薬の長い道のりを理解できた」
「薬をつくるには多くの時間と手間が必要と知っ
た」といった創薬プロセスやその大変さに関するコ
メントに加え、「『プラセボ』という言葉を学ん
だ」「薬価のところが興味深かった」など、来場者
が様々な学びを得たことがうかがえる多くのメッセ
ージが寄せられました。また、運営に関わった学生
たちからは、「伝える側を経験してすごく嬉しい気
持ちになった」「来場者との対話が楽しかった」と
いうポジティブなコメントのみならず、「集客のため
の宣伝の工夫が必要」「マス目の説明をもっと平
易にしたほうがよい」など改善ポイントも挙がりま
した。

このすごろくは、2026年以降に別の機会での出展も今
後予定しています。『おくすりレンジャー』の学生は
今回の体験を生かしてさらに資材をブラッシュアップ
していく予定です。

超ECO祭2025出展概要

実施チーム：おくすりレンジャー（親子向けチーム）
対象（来場者）：親子をはじめ、幅広い層（約180名）
実施日：2025年11月1日（土）・2日（日）
場所：イオンモールKYOTO 1Fセンターコート
出展名：すごろくdeおくすりができるまでを体験しよう！

『おくすりレンジャー』チームの資材

↓マス目（研究～薬価）

↓イベントマス（クイズ）

→イベントマス
（おくすりカード選び）



資材ダウンロード



ブース運営の様子

→ 学会への登壇

第24回日本ミトコンドリア学会年会 ランチョンセミナー概要

実施チーム：三位一体（研究者向けチーム）
対象（来場者）：研究者、会社員、医療関係者など約160名
実施日：2025年11月14日（金）
場所：ライトキューブ宇都宮

ランチョンセミナー当日には基礎研究・臨床に従事する医療関係者の方々、企業の皆さん、学生など、約160名が参加しました。学会発表やこれほど大勢の前での発表は初めてという学生も居り、緊張しながらも、自分たちの活動や想いを生き生きと語っていました。終了後には、大きな充実感と達成感を得たようでした。

アンケートでは「このような問題に意識を向ける学生がいることに希望を持ってました」「素晴らしい取り組みでぜひ頑張ってほしい」「創薬研究に携わる者として気が引き締まりました」「若い方だけでなく、我々もできることから活動していきたい」など、たくさんの応援の声や決意の声をいただくことができました。



集合写真



発表の様子

セミナーテーマ：Toward a Society Where Cutting-Edge Therapies Reach Patients （最先端の治療法が届く社会を目指して）

座長：埼玉医科大学 客員教授・名誉教授 大竹明

演者：

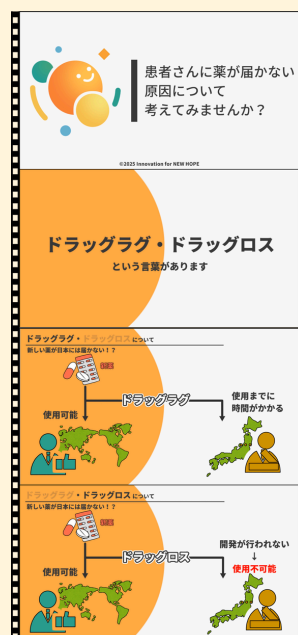
- ・アステラス製薬株式会社アドボカシー部 大野好美
- ・自治医科大学小児科学・教授 小坂仁
- ・IfNH学生アンバサダー『三位一体』

2025年11月14日（金）、Innovation for NEW HOPE 委員の小坂仁さんが大会長を務める第24回日本ミトコンドリア学会年会（以下、本年会）のランチョンセミナーにて研究者向け資料を制作したチーム『三位一体』が発表を行いました。

チーム『三位一体』の学生メンバーの中には、文系や非医学・薬学の理系メンバーもあり、「研究者」というターゲットにどのような内容を伝えるのが適切か悩みながら、動画や発表スライドの制作に取り組んできました。

動画は当初は音声はバックミュージックのものだったのですが、9月の発表会でいただいた意見をもとに、視覚障害のある方でも動画の内容を理解できるよう、内容読み上げ音声バージョンの動画を追加で作成し、今回使用することができました。

『三位一体』チームの資料



↓発表スライド



←動画

資料ダウンロード



→ 中学校での授業

流通経済大学附属柏中学校での授業概要

実施チーム：東西💖（高校生向けチーム）
 対象：中学2年生（約150名）
 授業時間：総合的な学習の時間
 場所：流通経済大学附属柏中学校

高校生向け資料を制作した『東西💖』チームは、流通経済大学附属柏中学校で授業を実施しました。

【1限目：授業】身近な医薬品に関するクイズやドラッグラグ・ドラッグロスに関する動画の視聴、双方向での質問など、中学生の興味を引く工夫をすることで、中学生の皆さんは難しい内容にも積極的に向き合い、真剣に講義を聴いてくれました。

【2限目：ディスカッション】「ドラッグラグ・ドラッグロス解消のため私達ができることは？」をテーマに、いくつかの視点から近くの中学生同士でディスカッションを行いました。チーム『東西💖』のメンバーである大学生・大学院生が教室を周りながら声を掛けることで、とても活発な議論が行われました。中学生からは「病気になるように生活習慣を見直す」「多くの人にこの話を知ってもらおう」「寄付金を集める」など、様々な意見が出ました。

中学生の活気を感じながらの授業は大学生・大学院生である『東西💖』チームにとって、大きな達成感と自信につながる機会となりました。

中学生からは、「とても分かりやすく楽しい授業だった。私も大学生になったらやってみたい」「身近な薬も長い期間やたくさんのお金、人をかけていたのでそのことを考えながら薬を使っていきたい」「医療にはあまり興味はありませんでしたがわかりやすい解説で理解がとても深まりました」という声をいただきました。

『東西💖』チームの資料



授業の様子

さらに、今回の取り組みは1日の授業だけで終わるものではありませんでした！その後の探求活動として、「遺伝子治療・細胞医療」「薬ができるまで」「薬価制度」「社会保障制度」「ドラッグラグ・ドラッグロス」の5つのテーマの中から、中学生それぞれが興味のある分野を選び、調べ、学習を進めました。大学生・大学院生による授業をきっかけに、中学生の興味・関心が広がる機会になりました。

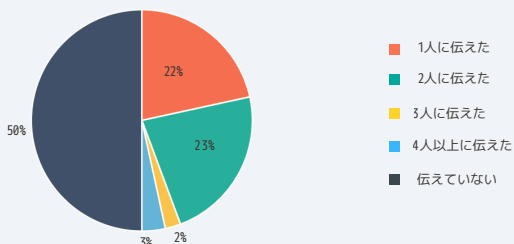
事後アンケート

自分たちの授業が中学生にどの程度伝わったのか、そしてどのような広がり生まれるのか、そのインパクトまで確認したいという思いから、『東西💖』チームは授業直後と2週間後にアンケートを実施しました。

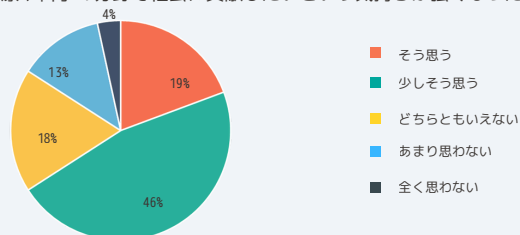
授業の約2週間後に実施したアンケートでは約半数の生徒が1人以上の人に学んだことを伝え、約7割の生徒で医療・科学の分野で貢献したいという気持ちが強くなったことが確認できました。

授業の2週間後に実施したアンケート結果 (n=88)

問：講義で学んだことを、内容を知らない周りのひと（家族・友達など）に伝えたか



問：将来、医療や科学の分野で社会に貢献したいという気持ちが強くなったか



→ 学園祭への出展

京都大学11月祭概要

実施チーム：優しみレボリューション☆
まもりソ！私立アステラス大学
(大学生向けチーム)
対象(来場者)：大学生等(約100名)
実施日：2025年11月23日(日)
場所：京都大学吉田キャンパス
出展名：医療クイズ あなたの1歩で変わる医療

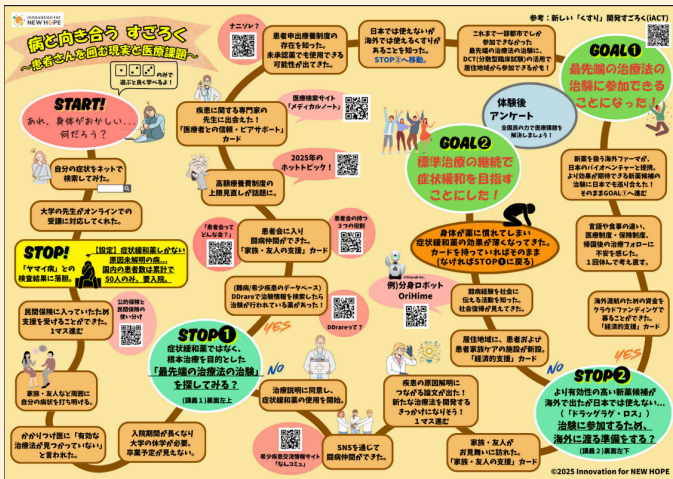
2025年11月23日(日)に京都大学11月祭に出展したのは大学生向け資料を制作した『優しみレボリューション☆』と『まもりソ！私立アステラス大学』の2チームです。

『優しみレボリューション☆』チームは、“ある日突然未知の病にかかるという場面を疑似体験する”「すごろく」を制作しました。一人ひとりと丁寧に対話しつつ、ポスターも使いながら、医療課題や治験について説明しました。来場者も質問したりするなど熱心に話を傾けていました。

来場者からの反応として、最も課題に感じたことは「ドラッグ・ラグ/ドラッグ・ロス」「治療機会の不平等」が多く挙がり、自身が貢献できそうなことについては「情報収集やボランティア活動」「周囲への啓発」といったものが挙がりました。また、来場者から「勉強になりました」「ありがとうございます」といった前向きな感想を直接もらったことは、『優しみレボリューション☆』チームにとって、医療課題への関心の幅を広げることができたことを感じられて、有意義な経験となったようです。

『優しみレボリューション☆』チームの資料

↓すごろく



医療クイズ あなたの1歩で変わる医療

2つの体験型学習を通して、日本における現在の医療課題を知っていただき、
>>> 自分自身の健康・将来を見直すきっかけに…!

☑ どんな体験ができるの?
 体験ブースでは、2つの資料を体験できます！
 所要時間は各20分ほど！お時間あればぜひ両方体験ください！

① 「大学生である自分が、ある日突然未知の病にかかる」という場面を疑似体験する すごろく

② 自分の健康度を確認し、今後の目標を見つける 授業型学習

☑ 体験するには?
 🕒 11/23(日) 11:00~18:00
 📍 法経-北館 3階 第6演習室
 👤 年代問わず、誰でも参加いただけます！
 親子・おひとり様も大歓迎！

Innovation for NEW HOPE (運営企業：アステラス製薬株式会社) 
 © 2025 Innovation for NEW HOPE 



学園祭の様子

『まもりソ！私立アステラス大学』チームは、医療課題とその解決のためにできることについてのレクチャー用資料を制作しました。講義だけでなく動画やクイズを取り入れ、健康習慣に関するチェックで問いかけをしました。そのように双方向のコミュニケーションとなるよう工夫を重ねた結果、来場者は最後まで真剣に話を傾けている様子でした。

来場者からは「一次予防の重要性」や「ドラッグ・ラグ/ドラッグ・ロス」が印象に残ったとのコメントに加え、「自身の健康管理」「医療に関する知識を深めたい」といった自身の行動についてのメッセージも寄せられました。また、来場者が医療課題について考えるきっかけになったことは、『まもりソ！私立アステラス大学』チームにとって、出展の意義を感じる機会となったようです。

コラボレーションの一例

iACT戦略・広報室のご協力により、すごろくを体験いただいた方へ、iACTで制作した臨床研究・治験に関するマンガ(右)を配布しました！



資料ダウンロード

→ 大学での授業



茨城大学教育学部での授業概要

実施チーム：まもりソ！私立アステラス大学
 (大学生向けチーム)
 対象：養護教諭過程の大学1年生 (35名)
 実施日：2025年11月12日 (火)
 場所：茨城大学水戸キャンパス

茨城大学の石原研治先生のご厚意により担当の授業の枠を『まもりソ！私立アステラス大学』チームにご提供いただき、2025年11月12日 (火) に養護教諭過程の大学1年生へ向けた『まもりソ！私立アステラス大学』チームの講義が実施されました。

『まもりソ！私立アステラス大学』チームにとって、大学生への講義は今回が初めてで緊張もあったようです。双方向性の授業になるよう工夫してコミュニケーションを取ったこともあり、茨城大学の学生たちは熱心に耳を傾けている様子でした。その後のディスカッションでは、茨城大学の学生から積極的な意見が多数出て、『まもりソ！私立アステラス大学』チームにとっても大きな学びとなったようです。



講義の様子

アンケートでは、茨城大学の学生から「薬の処方や薬価についての理解が深まり、薬が当たり前ではないことを認識した」「ドラッグ・ラグやドラッグ・ロスについての知識が新たに得られた」などの感想が寄せられました。今回の講義は、それぞれの学生にとって学びや気づきの多い貴重な機会になったようです。

講義後、『まもりソ！私立アステラス大学』の学生から「私たちがこれまで続けてきた活動を、1日ですっかり体験してもらえたのではないかと感じています」「自分たちの存在意義を強く感じる事ができた」などのコメントがあり、手応えを感じたようです。

後日談ではありますが、この講義に参加した茨城大学の学生の一人が、次年度のInnovation for NEW HOPE 学生協働企画にエントリーし、新しい協働が始まっています。

『まもりソ！私立アステラス大学』チームの資料



↑導入動画

↓生活習慣病予防アクションプラン

塩分

塩分の摂り過ぎ

ラーメン・お弁当・スナック菓子など、手軽でおいしい食べ物には、意外と多くの塩分が含まれています。しかし塩分をとりすぎると、体に余分な水分がたまりやすくなり、高血圧の原因になります。そのまま放っておくと、脳卒中や心臓病、腎臓病など、命に関わる生活習慣病につながることもあります。日本人の1日あたりの塩分摂取目標は男性が7.5g未満、女性が6.5g未満(理想は6g未満)とされているため、今のうちから塩分の摂り過ぎには気をつけるようにしましょう。

食品の塩分量

ラーメン	7g
お弁当	6g
スナック菓子	5g
惣菜	4g
漬物	3g
漬物	2g
漬物	1g

資料：大塚製薬「塩について」 | 毎日作る食品の塩分量 | 塩分 減らす | https://www.daiichisankyo.com/japanese/health/02_21601/ | ©2025 大塚製薬株式会社

↓クイズ+講義資料

ここからは動画について考えるクイズです！

なぜ薬が「強い」人と「弱い」人がいるのか一緒に考えていこう！

©2025 Innovation for NEW HOPE まもりソ！

風邪で病院に行ったとしてどのくらいの費用がかかっているか考えてみましょう！

まもりソ！

私たちはこう考えます

「一次予防」は未来を守るカギ！

「一次予防」は何か？

風邪や感染症を未然に防ぐこと

資料ダウンロード



講義終了時アンケート

アクティブな投票 34票

本日の授業で印象に残ったことを教えてください。キーワードでも構いません

薬価引き下げの取り組みを初めて知った
 一次予防の大切さ 視野を広げるべき ドラッグロス
 身近なところから続けていける社会のための自分の健康を気遣っていきいたい。
 運動はある程度しているので睡眠と食事に気を掛けていきたいと思った！
 養教としてどのようなことから医療問題を伝えていけばいいのかが一次予防、薬の問題 適度な受信が大切！！ 医療格差
 身近な健康問題の改善を心がける大切さを、子供の頃から意識づけること
 視点が足りないと思った
 薬価について自分が初めて知った分野だったから、聞いて楽しかった
 自分の知らない医療問題がある。

授業の終了時にはSlidoを使って茨城大学の学生のみなさんに「印象に残ったこと」を聞きました。それぞれの感想が『まもりソ！私立アステラス大学』の学生にとって感慨深いものになりました。

→ 健康実践教室

健康づくりのための健康実践教室概要

実施チーム：あいしずだもんで（シニア世代向けチーム）
 対象：「健康づくりのための健康実践教室」参加者（約30名）
 日時：2025年11月29日（土）
 場所：名城大学 八事キャンパス 体育館

名城大学薬学部梅田孝先生のご協力により「健康づくりのための健康実践教室」に『あいしずだもんで』チームが参加しました。

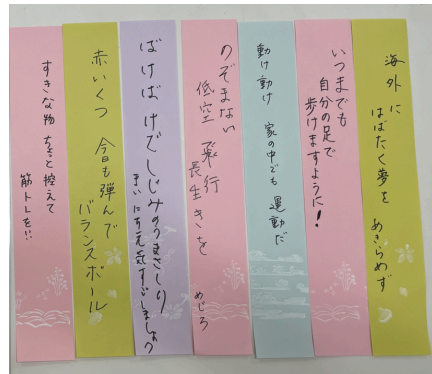
最先端の治療法や医療・薬を取り巻く現状について、ポスターを用いて分かりやすく紹介しながら、参加者との対話を進めました。
 さらに、対話の中で生まれたアイデアや気づきを自由に表現する「川柳大会」も開催。健康実践教室に参加されていた方だからこそ、健康への想いが詰まった川柳が披露され、会場は笑顔とあたたかな雰囲気になりました。

参加者からは、「ドラッグ・ラグ/ドラッグ・ロスの状況は初めて知った。このような機会はとてもよい。ぜひまた開催してほしい」「医療資源を無駄づかいしないように心がけたい」というコメントがありました。



対話の様子

『あいしずだもんで』の学生にとっては、参加者との直接の対話やフィードバックを通して新たな発見があり、今後の活動へつなげる貴重な経験となったようです。



来場者の川柳

→ MY(明治安田)定期講座

明治安田生命保険相互会社静岡支社のご協力によりMY（明治安田）定期講座に『あいしずだもんで』チームが参加しました。

横幅約1.3mの大きなポスターを会場に掲示し「これからものしく、健康であるためにどんな習慣をつけていますか？もしくはつけたいと思っていますか？」という質問から対話をスタート。丁寧にコミュニケーションを続けました。

参加者からは、「趣味を通じて心身ともに健康でいたい」「健康であることが、薬を必要としている人を支えることにつながるとは思わなかった」という声が寄せられました。
 また『あいしずだもんで』の学生からは、身近なコミュニティでも情報発信をしていきたいという言葉があり、今後の活動の広がりも感じる機会となりました。



対話の様子

『あいしずだもんで』チームの資料

1 自分も周りの人も健康でいて欲しい... でもなんとなく不安なことはありませんか？

2 例えばこんな不安もあります

3 最先端治療がなかった事例

4 実は他人事じゃないんです

5 じゃあ、私たちにできることって何だろう？

6 みんなで「最先端治療が盛く社会」を作っていけたら

↑ポスター

MY（明治安田）定期講座概要

実施チーム：あいしずだもんで（シニア世代向けチーム）
 対象：MY定期講座参加者（34名）
 日時：2025年12月17日（水）
 場所：青島北地区交流センター



資料ダウンロード

→ 学生振り返り



「振り返り会・交流会」学生集合写真

2026年1月22日、各チームからメンバーが集まり、「振り返り会・交流会」が開催されました。本会では、これまでの2025年度学生協働企画での各チームの発信活動の結果について互いに報告・意見交換し、チームを超えて交流することを目的として実施されました。

当日は、各チームでの発信活動を通じて得られた学びや気づきを共有する時間に加え、他チームメンバーから自由に意見交換を行う交流の場が設けられました。



↑ 発信活動の報告



→ 全体目標の振り返り

学生は、それぞれの経験や関心をもとに活発な対話を交わし、今後の活動につながる多様な視点に触れる機会となりました。

今回のイベントを通じて、学生協働企画の意義をあらためて確認するとともに、継続的なつながりや新たな協働の可能性を感じられる有意義な時間となりました。

世の中を変えるというと、政策提言を持っていくことをイメージしていましたが、小さなところからアプローチしなければならないことを知りました。市民の一人一人に知ってもらっていくこと、そういった小さな活動の積み重ねで認知の輪が広がっていくことに気づくことができました。

ここまで頑張れるんだという自信になったのが、得られたものとして大きいです。ここまで熱中してPJをやり遂げる経験は初めてでした。プロジェクトの中で、自分たちのやりたいことがやらせてもらえてよかったです。

解決策を考える過程や、他の大学の人のとの会議や触れ合いが楽しかったです。情報をもらう側ではなく、伝える側になり、専門知識を相手に合わせて言い換える力を鍛えられました。知識を持つことと伝えることは違うことを痛感しました。

1年間の活動を通じて得たこと・変化したこと

※ 運営事務局が参加学生にオンラインヒアリングを実施

高い志をもつ学生・社会人、能力の高い人が多いプロジェクトに関わることができ、刺激をもらえました。周りから良い刺激を得てまた頑張れるという、良いループに入ることができました。

これまでグループ議論で意見を言うのが苦手でしたが、今回のプロジェクトでのチーム活動を通じて、グループ議論でも自分の意見が言えるようになりました。チームメンバーもよく話を聞いてくれて感謝しています。

以前よりも社会の課題に視点が向くようになったと感じています。これまで興味関心がなかった医療の課題を知り、関連する情報をキャッチするようになりましたし、自分にできることを考えるようになりました。

→ おわりに



この1年間、学生の皆さんとともに社会課題解決に取り組んでまいりました。走り抜けた本プログラムはまさに「挑戦」の連続でした。

初めて顔を合わせ、学部も学年も異なる26名の学生が、6つのチームに分かれて成果物の制作に挑戦。学業と両立しながらチームで制作する難しさや、目標を意識し続ける大変さも実感しました。一方で、体験プログラムを通じて感じた一人ひとりの想いを仲間に伝え、対話を重ねながら互いの立場や考えを理解し、深め合う過程こそが、このプログラムの大きな価値であったと感じています。

今年度は情報発信においても、学生自身が企画書を作成し、発信の場を見つけ、実装まで主体的に取り組ましました。体験プログラム②で全員で掲げた「医療の課題について学生ならではの視点を活かし自ら伝えられる人になることで医療と市民のかけ橋になる」という目標を、まさに体現してくれたと感じています。

力強い26名の学生に出会い、Innovation for NEW HOPEのパーパスである「日本で最先端の治療法を1日でも早く継続して届く社会の実現」に向けて、確実に前進していることを実感しております。これからも出会った学生の皆さんとともに挑み続けてまいります。本プロジェクトに参加してくれた学生の皆さん、そして関わってくださったすべての皆さまに、心より感謝申し上げます。

今後とも、学生ならびにInnovation for NEW HOPEの活動に期待をお寄せいただき、温かく見守っていただけますと幸いです。

Innovation for NEW HOPE 委員一同
アステラス製薬アドボカシー部 担当者一同



協力者一覧

このプロジェクトでは、以下の方々にお世話になりました

学生募集

安武伸朗さん（常葉大学）
早乙女周子さん（京都大学）
前田英紀さん（明治薬科大学）
丹羽敏幸さん（名城大学）
才木亮嗣さん（名城大学）
小泉大輔さん（横浜市立大学）
吉田浩さん（東北大学）

体験プログラム

岸部知佐子さん
五十嵐中さん（東京大学）
伊東美和さん（株式会社オリィ）
小池祥悟さん（明治安田生命保険相互会社）

政治関係者との対話

谷本龍哉さん（事業構想大学院大学）
本田あきこさん（参議院議員）

発信活動

山本尚輝さん（クラーク高校）
兼龍盛さん（流通経済大学付属柏中学校）
石原研治さん（茨城大学）
梅田孝さん（名城大学）
天野雅史さん（明治安田生命保険相互会社）

Innovation for NEW HOPEの活動に興味・関心をお持ちの方、連携を希望される方は
お気軽に下記までご連絡ください

【運営企業】

アステラス製薬株式会社

アドボカシー部 エキスパートネットワークキング

〒103-8411 東京都中央区日本橋本町2-5-1

E-mail : newhope-sm@astellas.com

こちら↓から
E-mailアドレスに
アクセスできます

